〔論　文〕

体験的報告――日韓マスメディアの翻訳をめぐる諸問題

Aspects of the Problems of Translated Japanese and Korean Languages in Mass-media News

下　川　正　晴
Shimokawa Masaharu

はじめに

筆者は1989年～1994年、毎日新聞ソウル支局長として国際報道の実務に当たった。また2005年には韓国外国語大学校言論情報大学の客員教授として、日韓メディアの研究に従事した。その間、脳裏を離れなかったことが実務的な問題がいくつかある。「韓国語から日本語への翻訳」をめぐる問題も、そのひとつであった。韓国の新聞表記を日本語に翻訳しながら、しばしば「韓国語のニュアンスが読者に正確に伝わるだろうか」と思ったものだ。また、東京発の韓国紙の特派員記事を読みながら、「日本語を正しく理解できていないのではないか」と不信感が募ったこともある。

たとえば、「우익」をどう翻訳すればいいのか？単純に「右翼」と翻訳していたが、日本での「右翼」と韓国語の「우익」はどうもニュアンスが違うようである。日本語の場合、「右翼」という言葉は「非常に保守的な、または国粋主義的なものの考え方をする立場。またその人」（角川必携国語辞典）と辞書では説明される。しかし、「右翼」という言葉には「１人１殺」の血盟団事件、５・15事件、２・26事件、さらに戦後の右翼テロなど昭和史の記憶から、テロ、殺傷、暴力といった語感がつきまとう。韓国語の「우익」には、そこまでのニュアンスはないようだ。「우익」は「右派」とでも翻訳すればいいか？　最近はそう思っているが、どうなのだろうか。

「日韓メディアの翻訳をめぐる諸問題」について考察してみたい。ソウルの学術会議を契機にこの問題に取り組んだのは、上記のような私の実体験と無関係ではない。

日本人と韓国人の相互認識の形成に当たって、日韓メディアの役割と要因は、強調しすぎることはない。メディア、特に特派員はニュース報道の「ゲートキーパー」として、あるいは「メディアフレーム」の形成者として、大きな機能を果たしている。国際ジャーナリズムと翻訳の問題は、歴史的経験から見ても重要である。

日韓翻訳の問題はインターネット時代を迎えて、より注意深い取り扱いが必要な問題として浮上してきた。朝鮮日報、中央日報、東亜日報、聯合ニュースが相次いでWEB上で「日本語版」を創刊し、韓国のニュースが日本語で読めるようになった。しかし、このことが日本側では逆に韓国のニュース報道への違和感を醸成しつつある。韓国紙の日本語版には

1　本稿は2007年10月20日、ソウルの韓国外国語大学校通訳翻訳大学院主催の国際学術会議で報告したものを、加筆修正したものです。

「拙劣な翻訳」も少なくない。このことによって日韓のコミュニケーション・ギャップも起きつつある。

「日韓メディアの翻訳をめぐる諸問題」を、1、日本の近現代史と誤訳問題――英語の翻訳　2、日韓関係と翻訳問題　3、インターネット時代の日韓「翻訳」紛争　4、韓国の翻訳教科書に見る諸問題　5、個別の翻訳語における諸問題、の順で考察してみたい。

1、日本の近現代史と誤訳――英語の翻訳

＜歴史を変えた誤訳＞

日本の外交史上、「誤訳」の最たるものと言われるのは、ポツダム宣言に対する日本側の回答で、「黙殺」とあるのを「ignore」と英訳したことである。この表現によって連合国側の態度が硬化したと言われる。「黙殺」は、せめて「give it a silent treatment」と翻訳すべきだった、との主張がある[2]。この「黙殺→ ignore」の翻訳は、当時の国策通信社である合同通信によって行われたようだ。この「誤訳」は「原爆投下を招いた」ともされるが、それは少し言い過ぎだろう。終戦直前の歴史は、それほど簡単なものでない。すでに「勝者（米ソ）による世界分割」作戦が開始されていたからだ。

連合国側では「黙殺」は、「reject」の意味として解釈されたという[3]という説もある。ちなみに「広辞苑」（第５版）によると、「黙殺」は「無言のままで取り合わないこと。問題にせず無視すること」である。また、国語学者の大野晋氏（学習院大学名誉教授）によると、「知っているけれど知らないふりをして相手として取り上げない」という意味であり、日本人独特の対人関係を表現する言葉、であるいうという[4]。

いずれにしろ外交文書における「キイワード」を、日本人の間でも解釈が分かれる「微妙な表現」を使うことによって外国人に誤解を招き、自らの「墓穴」を掘るという習癖は、日本外交史上で頻繁に繰り返されてきた。（日本の「謝罪外交」でキイワードになった「痛惜の念」については第２章で詳述する。）

日本における日英同時通訳の先駆者の一人である鳥飼久美子･立教大学大学院教授は「歴史をかえた誤訳」（新潮文庫）で、日米間で問題になった翻訳上の問題について、上記の「黙殺」問題以外に、①「善処します」という日本語をどう英訳すべきか？（佐藤栄作首相当時）、②「ハリネズミ」の英訳は？（鈴木善幸首相当時）、③「大きな航空母艦」を「不沈空母」と訳していいのか（中曽根康弘首相当時）などの実例を挙げて、解説した。これらは日本語と英語のニュアンスの差がもたらした「誤訳騒動」の例である。

＜エコノミック・アニマル＞

「エコノミック･アニマル」という言葉は、1965年、パキスタンのブット外相（当時）が述べた言葉であり、日本や韓国では「日本人を侮蔑した表現」として知られている。

2　西山千「通訳術と私」（プレジデント社）

3　中村隆英「昭和史（1926-1945）」（東洋経済新報社）

4　鳥飼久美子「歴史をかえた誤訳」（新潮文庫）

しかし、「『エコノミック・アニマル』は褒め言葉だった」（新潮新書・2004年）を書いた現役外交官・多賀敏行によると、真相はいささか異なる。多賀は「英国の偉大な政治家であったウィンストン・チャーチルは、よくpolitical animalと言われた。（中略）。少なくともイギリス英語ではエコノミック・アニマルという表現は少しも侮蔑的でない」と指摘して、通説に疑問を投げかけている。ブット氏はオックスフォード大学を卒業し、完璧なイギリス英語が話せる人物だった。

また、ＥＣ（欧州共同体）の秘密文書（1979年）は、日本の家屋を「ウサギ小屋」（rabbit houses）と述べ、日本を侮辱した表現として有名になった。しかし、多賀がフランス語原文を入手して調べてみると、それは「cage a lapins」(画一的な狭いアパルトマンの多くからなる建物)だった。フランスの政府系住宅公団が中低所得者用に建てた住宅が「cage a lapins」の典型なのだという。したがって共同通信ブリュッセル支局は、これを「rabbit houses」ではなく「council houses」と英訳すべきだったと、多賀は指摘している。

このような多賀の議論は、いささか「決め手に欠ける」ところがあるものの、従来の「定説」を再考する良い機会を与えてくれるものと理解したい。

＜意図的な誤訳＞

前述の鳥飼によると、通訳者が意図的に誤訳を行った例もある。米国の反戦歌手ジョーン・バエズが1967年、東京でコンサートを行った際、バエズが「ナガサキ、ヒロシマ・・」と発言したのに、日本人通訳が「この公演はテレビ中継されます」などと、バエズの発言を再三にわたって、ねじ曲げて通訳したようなケースだ。ＣＩＡ（米中央情報局）を名乗る男から「政治的発言をしたら、意味をそらして通訳してほしい」という電話が通訳氏にかかってきたからだという。笑止千万なエピソードである。

1994年、東ティモールを日本の国会議員団が訪問したときも「意図的な意訳」騒ぎがあった。社会党議員が「統合される際に大変な殺戮があったと情報としてうかがっている。当時の人口の４分の１でしょうか、多くの方々が戦乱と飢えで亡くなられたとうかがっている」と話したのを、通訳に当たった日本大使館の一等書記官は「統合の過程で飢餓とか、時に殺害などがあったということだ」と通訳した。これは通訳者の「独自の判断による取捨選択」「歪曲と操作」として非難された。

２、日韓関係と翻訳問題

＜「痛惜の念」＞

日韓関係で起きた「誤訳」に関する研究は、まだ多くはないようだ。しかし「翻訳」をめぐって、日韓外交上の論議や、メディアの報道がなかったわけではない。

盧泰愚大統領の日本訪問（1990年）の際、天皇が述べた「痛惜」という言葉は少なからぬ波紋を呼んだ。当時、韓国外相だった崔浩中氏の著書「外交は踊りだ」の一節には、次のような記述がある。日本語訳から引用する。

「私が外務長官職を任されているとき、盧泰愚大統領の日本訪問が決定された。1990年５月だった。そうするとすぐ、いつもそうだったように天皇の謝罪問題が再び大きくぶくぶ

くと泡立ち始めた。(中略) 国内の雰囲気を柳健一駐韓日本大使に知らせ、事前調整をした結果、日本側が最終的に提示した天皇の謝罪文案は『日本によって招来された不幸であった時期に、韓国民たちが経験した苦痛を思い、痛惜の念を禁じえない』というものだった。これは誰が誰に苦痛を与えたのか言及しなかった前例とは異なり、日本がわれわれに及ぼした過ちだということを明白にした点で一歩進んだものではあるが、問題は『痛惜の念』という表現だった」

「日本がどういう底意で、一般的によく使うことのないこのような文句を骨折って探し出したのか。私は柳大使に、これが確定した日本側の最終文案であることを確認した後、『痛惜の念』とは、過ちを痛む心で悔いる、ということとして受け入れるといい、これに異議がないかと尋ねた。柳大使はそのような意味に解釈してもよいと了解した)」

当時、筆者は毎日新聞ソウル特派員だった。「天皇のお言葉」がどのような表現に落ち着くのか、ソウル側で取材した経験がある。「痛惜の念」という言葉は、日韓外交当局間で最後まで秘密扱いにされた。

「天皇が5月24日、宮中晩餐でこの謝罪発言をした後、私は『痛惜の念』を、痛む心で悔いると解釈するよりも、骨身に沁みて悔いると解釈するのが適当だと思った。『痛恨の失策』というとき、わが国の言葉ではよく『骨身に沁みる過ち』というではないか。日本語でも骨まで愛するとか、骨に沁みる痛みとかいう表現を使う場合が多いのではないか」

「盧大統領に随行した公報首席秘書官協議して、『痛惜の念とは骨身に沁みて悔いる』という意味だという公式解釈を明らかにすると、日本の当局や言論は静かだったが、われわれの言論はこれを激しく批判した。無理に解釈を出して自分の手柄にしようとつくろっていると皮肉った。ある新聞は『痛惜を哀惜とみなす』という社説まで載せた」

今にしてみれば、「痛惜の念」という言葉を「骨身に沁みて悔いる」と解釈した崔浩中外相の判断は適切なものだったと、筆者は考える。しかし当時は、日本人にとっても「痛惜」という言葉は馴染みのないものであった。最近でこそ「痛惜」という言葉は頻繁につかわれるようになったが、当時の状況では韓国側マスコミの解釈が混乱したのは無理もないことであろう。

＜小泉首相「互いに反省」＞

小泉純一郎首相が2001年10月15日、ソウル西大門独立公園で行った発言も、韓国外務省による翻訳を韓国マスコミが問題にしたケースだ[5]。

同日の朝鮮日報（ＷＥＢ日本語版）によると、日本の外務省北東アジア課の「公式録取録」は、小泉首相が日韓両国の過去に対し言及して「これから互いに反省しつつ、このような二度と苦難の歴史を歩まないよう協力していかなければならない」と述べたと記録している。しかし、韓国の外交通商部が日本側の「公式録取録」を翻訳し、韓国マスコミに発表する際には、小泉首相が「反省しつつ、このような苦難の歴史を二度と歩まないよう、これから互いに協力していかなければならない」と述べたとなっている。つまり、「反省しつつ…」の前にあった「これから互いに」という言葉が「協力して」の前に移った。この

5　朝鮮日報2001年10月16日

ことによって「互いに反省」が「互いに協力」に歪曲されたというわけである。

同紙によると、この指摘に対し外交通商部当局者は、「この問題に対する解明を要請した際、日本側が“これから互いに”は“協力”を修飾するものだと説明したので、このように翻訳した」と解明した。駐韓日本大使館の関係者も「韓国政府に“これから互いに”は“協力”を修飾すると解明した」と述べたという。

しかし同紙が述べているように、「これから互いに反省…」となっている日本側の記録を、韓国政府が「これから互いに協力…」に変えたのは、「国内の批判的な世論を恐れ、事実をわい曲したのではないかという批判を避けられない」と指弾されても、いたし方ない点であろう。

＜細川首相の「創氏改名」＞

日韓首脳会談の席上、日本の首相が話した内容が日本語では伝えられず、韓国語で記者団に伝えられたという異常な事例もある。これも筆者自身が体験したケースだ。

1993年11月6日、細川護熙首相（当時）は韓国・慶州で行った金泳三大統領との会談で、植民地支配に対する明確な謝罪を行った。「朝鮮半島の人々が学校における母国語教育の機会を奪われ、自分の姓名を日本式に改名させられたり、従軍慰安婦、徴用など、耐え難い苦しみと悲しみを経験されたことに心より反省し深く陳謝したい」。このように述べたことは、いまや歴史的事実として定着している。

しかし、これには意外な裏話がある。当時ソウル特派員だった私は現地で取材に当たっていたのだが、実は、日本外務省が現地で行ったブリーフィングでは、「自分の姓名を日本式に改名させられた」（創氏改名）のくだりは記者発表されていなかった。しかし、その後に行われた韓国側のブリーフィングで、細川首相が「創氏改名」に言及したと説明された。記者団からその矛盾点を就かれた日本側は、後になって初めて事実を認めたのである。

なぜ、こんな事態が生まれたのか？　当時の駐韓日本大使館筋の説明によると、細川首相を交えた日本側の事前勉強会では、首相が「創氏改名」に言及するというシナリオはなかった。外務当局にしてみれば、「創氏改名」発言はフライングに近かった、だからブリーフィング内容と実際の発言内容が異なるという事態になったのだという。これは「翻訳」以前の問題である。「意図的な隠蔽」と批判されても仕方のない失態である。

３、インターネット時代の日韓「翻訳」問題――ケーススタディ

インターネット上で韓国の新聞が、日本語で読めるようになった。日本語ページ創設で先行した朝鮮日報が「日本版WEB」を始めたのは、フランスW杯（1998年）以降だった。そして日韓共催W杯（2002年）の時には、早くも全盛時代を迎えた。

日本語訳された韓国情報は、日本のインターネット掲示板「２ちゃんねる」などで頻繁に取り上げられ、「嫌韓ムード」の醸成に一役買った。皮肉というしかない。日本人の間で「韓国語が分かる読者」が増えており、日本マスコミのソウル発記事に対する批判も急増した。「韓国の４強進出」をめぐる「審判問題」で、日本マスコミの論調がきわめて微温的で「日韓友好」一辺倒だったことも、この傾向に拍車をかけた。

＜「야단법석」は大騒ぎか、馬鹿騒ぎか＞

次の文章は2006年7月、日本のあるブログ[6]に掲載された文章である。韓国大統領府が北朝鮮のミサイル発射に対する日本政府の対応について、批判的な声明を発表したというソウル発のニュース報道に関連して書かれた文章だ。このブログは「야단법석」という韓国語の翻訳をめぐって、朝日新聞の姿勢を批判し、ネット住民間で起きた紛糾の契機になった。

朝日新聞（2006年7月10日）の記事 「韓国大統領府は9日、ホームページに掲げた文章で北朝鮮のミサイル発射への対応に触れ、『強いて日本のように未明から大騒ぎする必要はない』とし、日本の対応に否定的な見方を示した」

ブログの記事（文章を一部簡略化した）「声明を原文に忠実に翻訳すると、次のようになります。『敢えて日本のように夜明けから馬鹿騒ぎ（야단법석）をしなければならない理由は無い』。韓国語で『大騒ぎ』に相当する表現は『소란을 피운다』を使います。『賑やかに騒ぎ立てる』くらいのニュアンスです。日本で報道されている『大騒ぎ』に近いのはこの表現です。大統領府の声明文で用いられているのは『馬鹿騒ぎ（야단법석）』という言葉です」

「この言葉のニュアンスや使われ方は、『大騒ぎ』とはまったく異なります。この『馬鹿騒ぎ（야단법석）』のニュアンスを敢えて表現すれば『教養の無い愚か者が状況を把握できず右往左往してギャーギャーわめき立てる』という感じです。通常、韓国人の間で対等な立場の人間に対してこの言葉を使うことは決してありません。あくまで相手が目下の人間で、かつ、強い侮蔑の意を表したい場合にのみ用いる言葉なのです。（中略）」

「普通の先進国が外交の場で他国に対して使うことが許される言葉ではまったくありません。万が一にも小泉首相が『韓国は靖国参拝で馬鹿騒ぎ（야단법석）し過ぎだ』などと述べたら日韓関係は一気に破局的な状況に陥ることでしょう。例え口頭であっても『うっかり失言した』では済まされない侮蔑表現です。このような言葉を韓国大統領府が『公式声明』の中で"書き言葉"として使うのは、異常事態と言ってよいのです（中略）」

「報道人の本分は報道にあり、政治家の本分は政治にあります。『馬鹿騒ぎ』と口に出したいところを相手に配慮して『大騒ぎ』と言い換えるのは、あくまで政治家に求められる感性です。報道人に求められるのは、『馬鹿騒ぎ』を『馬鹿騒ぎ』と正確に翻訳して伝える感性です。なぜならば、『馬鹿騒ぎ』を『馬鹿騒ぎ』と翻訳することで初めて浮かび上がってくる真実がそこにあるからです」

こういった文章が世間の耳目を引くようになったのは、筆者のソウル特派員時代（1989－1994）には，なかったことである。①韓国紙の日本語WEBが存在しなかった②韓国語に精通した日本人が多くなかった③インターネットメディアが発達していなかった、からだ。しかし、この3つの条件が成立するようになった今日、ソウル発の特派員報道をめぐって、日本の読者から「誤訳だ」と指摘される事態が出現するようになった。

---

6 usbmouseブログ：2006年7月10日
http://blog.goo.ne.jp/usbmouse/e/4f26a43c79ef6ee2c5bf2f6f8cc0d0c8

＜ブログ VS ブログ＞

もちろん、このブログの主張に対しては、反論も少なくなかった。

「『야단법석』を『馬鹿騒ぎ』に翻訳するほうが誤訳で、『大騒ぎ』にするほうが無難。（私なら、そうします）『야단법석』には『馬鹿』をつけるべきニュアンスが含まれていない。意味は『騒ぎが大きすぎる』。それだけ。使い方として『そこまで騒ぐことはない』と言ったところで使うことが多いのは確かですが。馬鹿にするとか、卑下するとかじゃないです。そんなことはない。」[7]

韓国語の辞書に当たった上で、反論したブログもある[8]。

「たしかに『야단법석』の訳語として『大騒ぎ』というんはちょっと弱い。でも、かと言って『教養の無い愚か者が状況を把握できず右往左往してギャーギャーわめき立てる』というニュアンスかというと、それもまた違う。『야단법석』という言葉から個人的に感じるニュアンスとしては、「大騒ぎ」の更にやかましいバージョン、とでも言えばいいのだろうか。教養のあるなしは、この際あまり関係ないと思う。(中略) では、『야단법석』とはどういう意味だろう。（中略）ヤフーコリアの国語辞典では、『야단스럽게 떠들거나 부산하게 구는일』とある。エキサイト風に言えば、『大層らしく騒ぐとか忙しくふるまう事』。야단は惹端と書く。惹起鬧端の略語で、これ自体は、『論争のキッカケを作る』程度の意味のようだ。転じて、大きく騒ぎ立てるという意味になる（大声で叱りつける、という意味もあるが)。『야단스럽다』で形容詞になれば、ニュアンス的に、ちょっと落ち着きを欠いて騒いでいる感じ。법석というのは法席と書く。何故に法席？ヤフーコリアに拠れば、「惹起鬧端な法席」が省略されてできた言葉、という説があるようだ。（中略)」

「(さらに、ネイバーの国語辞典、韓国ブリタニカの延世大学韓国語辞典、国立国語研究院の標準国語大辞典を引用した上で）メジャーと思われる韓国語辞書を４つほど当ってみたわけなのだけれど、だいたい総合すると、『야단법석』というのは『ある事のために、多くの人が一箇所に集まって、言い争いながらひどく大騒ぎすること』という感じなのではないだろうか。少なくとも、『馬鹿騒ぎ』の語意にある『調子に乗って』『度を過ごして』というニュアンスというのは原語には無いし、まして『教養のない』『愚か者』なんていうニュアンスには尚更距離がある、ということはわかっていただけると思う。（後略)」

このような文章を読みながら、筆者が思うのは「日本の外務省はどう翻訳したのだろうか？」ということだ。「大騒ぎ」ではなく「バカ騒ぎ」なのか？　怒り心頭に発した首相官邸が外務省に「どっちなんだ！？」と問い合わせるシーンがあったのではないか。そういう推測すら成立しそうな「翻訳騒ぎ」なのである。ちなみに、問題の箇所の英語訳（青瓦台）は、

There is no reason to particularly make a fuss in early morning as Japan did.

であったという。「fuss」は「大騒ぎ」のニュアンスに近い。

---

7 Commented by no_tenki at 2006-07-11 15:25

8 http://d.hatena.ne.jp/yadanbeopseok/20060711

＜過激発言に翻弄されるマスコミ＞

この青瓦台声明をめぐっては、韓国紙からも批判があった。

「北朝鮮によるミサイル発射への日本政府の対応を『大騒ぎ』と批判した韓国青瓦台（大統領官邸）の９日の文書公表に対し、同国の有力紙は10日、非難の社説を一斉に掲載した。朝鮮日報の社説は青瓦台ホームページに掲載された文書の主張を、▽盧武鉉（ノムヒョン）大統領の関心事は国民の安全と、国民を不安にさせないこと▽北朝鮮のミサイルは誰を狙ったものでもなく、危機とは言えないから、日本のように未明から大騒ぎする理由はない－－などと要約。この主張に対し同紙は、韓国政府はミサイル発射が迫ったとの情報を得ながら自国の民間航空機や漁船への警告を怠ったとして「国民の安全」軽視を非難。５日の発射実験が韓国にとって脅威でないという主張にも厳しく反論した。（後略）」[9]

政権トップの微妙できわどい表現が日韓間で紛糾の種になるのは、日本側の「痛惜の念」の例だけでもないことは、このことからも分かる。

金泳三元大統領の「ポルジャンモリ」発言を思い出す。同大統領は1995年、中国の江沢民国家主席（当時）との会談の中で、「日本のポルジャンモリの悪い癖を直してやる！」などと発言した。「ポルジャンモリ」とは、日本語で「バカたれ」などに相当する。この発言自体に対しても韓国内からも批判の声が上がった。当然のことだ。

日本政府が「痛惜の念」のようなあいまいな表現を使うと、外交当局者だけでなく双方のマスコミ・国民も迷惑する。金泳三氏や盧武鉉政権のような「過激な（難解な）言辞を弄する政権」が韓国に登場すると、ソウル特派員たちには「翻訳の苦労」が増える。これに加えて、インターネット時代の「海峡を超える熱気」が翻訳紛争に輪をかけているというわけだ。特派員や翻訳者には、難しい時代になったというしかない。

４、韓国の翻訳教科書に見る諸問題

この論文の制作に当たって、韓国の通訳翻訳大学院で推奨されている３冊の本に目を通した。キム・ハンシク「韓日通訳と翻訳」（韓国文化社）、キム・スニほか「韓日・日韓通訳翻訳の世界」（時事日本語社）、ウ・ギホン「日本通翻訳辞典」（ネクサス Japanese）の３冊である。この中には、新聞やテレビ報道に現れた単語、表現、文章をめぐって、少なくない記述がある。日韓報道の実務に当たった経験から、いくつかコメントしたい。

＜日韓新聞の見出しの違い＞

キム・ハンシクの著書で注目したのは、第４章「新聞ヘッドライン表現の特徴ならびにその翻訳戦略」である。ここで「新聞ヘッドライン」とは、「見出し」のことだ。内容はなかなか実際的で、翻訳も的確である。

キム・ハンシクによれば、韓国と日本の新聞見出しにはいくつか文末に特徴があるという。朝鮮日報、東亜日報、中央日報の３紙を分析した結果、韓国紙の見出しの末尾は、多いほうから、漢字語の名詞（42・２％）、体言（32・３％）、動詞（17・６％）、形容詞（４・

9　毎日新聞　2006年７月11日

２％)、名詞＋助詞（２・４％)、副詞（１・３％）の順であった。

これに対して日本の新聞（朝日、読売、毎日）の場合は、漢字語の名詞（46･８％)、体言（26・３％)、名詞＋助詞（14・３％)、動詞（10・２％)、形容詞（０・８％)、形容動詞（同)、副詞（０･６％）の順だった。日本の新聞の場合、韓国紙に比べて「名詞＋助詞」が多いのが特徴だ。

キム・ハンシクは、適切な日本語見出しをつけるために①不必要な助詞の省略②末尾を「名詞＋助詞」の形にする③不必要な表現や単語の省略④表現の簡略化⑤長い見出しは短文２つに分ける――ことなどを提言しているが、実務経験者の目から見ても、いずれも適切な助言である。特に助数詞の表記に当たって「名」ではなく「人」とすべきであると指摘しているのには、驚いた。日本のマスコミ表現を熟知しているからだ。NHK ソウル支局で同時通訳として活躍してきた経験の賜物だろう。

＜翻訳例文をデスワークすると……＞

筆者のような実務経験者から見て、キム・スニほか「韓日・日韓通訳翻訳の世界」には、いくつかの難点がある。たとえば、以下の翻訳例文だ[10]。

「訪韓中のボルトン米国次官（軍備管理・国際安全保障担当）は 22 日、ソウルで記者会見し、北朝鮮の核開発をめぐり、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）理事会で週内に新たな対北朝鮮決議を通過させ、同問題を国連安保理に付託することで米韓が合意した、と明らかにした」

この例文はあまりにもセンテンスが長いし、主語の「米韓が」が文章の末尾近くになって出現するという問題点がある。筆者がこの記事を修正するなら、次のようになる。

「訪韓中のボルトン米国次官（軍備管理・国際安全保障担当）は 22 日、ソウルで記者会見。北朝鮮の核開発をめぐり、米韓が国際原子力機関（ＩＡＥＡ）理事会で週内に新たな対北朝鮮決議を通過させ、同問題を国連安保理に付託することで合意した、と明らかにした」

体言止めでいったん文章を切り、「米韓が」を前に出すのがポイントである。なお同書には他にも数箇所、センテンスや単語翻訳に不適切な部分が散見されたが、ここでは詳述しない。

５、個別の翻訳語における諸問題――漢字

韓国、中国、台湾で意味が違う漢字について解説した辞書「日中韓漢字通用小辞典」を編さん中だという[11]。筑波大人文社会科学研究科の佐藤貢悦教授と八洲学園大生涯学習学部の厳錫仁准教授の共同作業である。辞書には、日常生活で使うことが多い 270 例を収録予定であるという。「愛人」は台湾では日本と同じ意味だが、中国では配偶者、韓国では恋人を指す。「手紙」は中国や台湾では「ちり紙」を指し、韓国では通じない。佐藤教授は「（中国や台湾に行った日本人が）筆談で『告』の文字を使うと『訴えるぞ』と受け止められる」

10　キム・スニほか「韓日・日韓通訳翻訳の世界」38 ページ。

11　毎日新聞 2008 年 8 月 28 日朝刊

と指摘し、「漢字の意味の違いを比べれば、互いの見方、考え方の違いを理解するきっかけにもなる」と佐藤教授。辞典は既に韓国で出版が決まっているという。

確かに、漢字言葉は日韓翻訳上の大きな落とし穴である。「東洋文化圏に共通する漢字言葉」だからと、たかをくくっていると痛い目にあう。有名なところでは、韓国語の「パルパンミイン」は褒め言葉だが、日本語の「八方美人」は批判の対象である。韓国人による日本語翻訳で「珍約」「奇訳」が散見されるのも、漢字が原因であることが少なくない。

若い韓国人研究者であるウ・ギホンの労作「日本通翻訳辞典」（ネクサス Japanese）や、前出のキム・ハンシク「韓日通訳と翻訳」（韓国文化社）の第１章第３節１「漢字語の韓日表現が違う場合」に列記された単語群は、確かに日韓相互翻訳に当たって注意を要するものばかりである。